

虚構

## 樹上の仏陀(二)

袴谷憲昭

ニ

停年を間近に、生まれて初めて小説を書くなどと言つてしまつたものだから、その物珍しさのために、学部内はおろか学内でもいろいろ冷かされ、会合の席の話の端にされることも多くなつた。必ずしも惡意に充ちたものばかりではないのだが、さりとて、私のために善かれと思つて言つてくれるような言葉も、私の感じている弱点にぴたりと触れた時には、やはり筆を置いた方がよいのではないかと何度も思はされたか知れやしない。そもそも、仏陀のことを書くのに敢えて作者が一人称でしゃしゃり出てくる必然性があるのかということも、小説作法上の觀点から好意的に質してくれる方も多かつたのだが、この点は私も大いに意識していることなので、一応は肯定しながら、でもこれは犯罪小説にする伏線でもありますので、と答えるのを常としてきた。しかし、これはでき

れば密かに実行したかったことなのであるが、口外してしまつたのでここにも記しておく。とはいへ、そうなるかどうかはやはり終つてみなければ分からぬのである。

さて、そんな終つてみなければ分からぬことはともかく置くとしても、私——平山茂道が余り関係もない場面で頻繁にしゃしやり出ない方がよいことは確かだろう。そんなわけで、私も、次にこの稿に手を着けるときは、必ずアッサジの声をもつて語り始められるようにと、随分構想も練つてきつたりなのであるが、なかなか思うようにその構想が熟さないうちに、とうとうこの次の機会が来てしまつた。しかし、別に強制的な機会ではないわけだから、充分に構想が熟すまで待つべきなのであるが、今回は、その構想とは別に若干述べて置いた方がよいだろうと思うことが生じたので、それを閑話休題的に記してしばしお茶を濁させてもらうことにした

まず、構想が現実化してきて、意外に気に掛ってきたのが、仏教の開祖の呼称のことだったのである。当然、私としては、今風の「ブッダ」という片仮名表記を避けさえすれば、「仏陀」であって一向に構わないと思つてきたりし、現に題名中にも「仏陀」が選ばれてしまつてゐる。私にこれを変更するつもりはないし、實際、題名はこのままでよいのだが、問題は、小説中でアッサジに語らせる場合の呼称なのである。この点に関しては、これまで大変無造作に、私が呼ぶのと同じように、「仏陀」か「釈尊」を状況によつて使い分けてもよいのではないかくらいに考へてきたのであるが、いよいよその段になつてみると、いかに虚構であろうとも、アッサジによる仏教の開祖に対する呼称くらいは、伝統的な仏典の形式に倣つべきであるとの思いが強くなつてゐた。

よく知られているように、經典は、大乗經典を含めてゐえ、その冒頭は、「」によつて私は聞いた。ある時、世尊は(evam me sutam. ekam samaye Bhagavā: evam mayā śrutam / ekasmin samaye Bhagavān)」と云つ形式で語り始める。これが漢訳では多くの場合「如是我聞。一時仏」とられて、インド側の原典にBhagavatとあるものが單に「仏」となつてゐる例が圧倒的に多い。稀に後代の漢訳などで正確を期すべく「薄伽梵」と音写される場合もあるが、同じ冒頭形式の中で「世尊」と訳されている例のあるのを私は

あまり知らない。」のよつた事情があるので大きく影響しているのかもしれないが、中国以来の漢訳仏教文化圏では、仏教の開祖を、その原語はともかくとすれば、「仏陀」もしくは「仏」と呼ぶのが普通である。しかも、私自身、かかる漢訳における慣例に殊更異を唱えるつもりは毛頭なかつたのであるが、仏教の開祖のことを、アッサジの口を通してインドの出来事として語ろうとすればするほど、できるだけインド的な呼称に従つた方がよいのではないかと思うよくなつたまにすぎない。

インド的な形態を留める伝統的仏典においては、仏教の開祖その人を客観的に第三人物で記述する時にはBhagavat(世尊)が用いられ、これに直接第二人物によつて語りかける時には、第二人物代名詞の尊敬語の呼格bhanteが使用されるのが一般的であるが、私も原則としてこれに慣つてアッサジをして語らしめようと思う。ただ、」の場合には、第二人物代名詞の尊敬語を現代日本語ではどう表現するのが一番よいかという、また別な問題に遭遇する。インド仏典的一般的な現代語訳においては、この問題のbhanteは「尊師よ」と訳されるのが普通であるが、今は例のオウム真理教問題のために、「尊師」という日本語自体が甚だ悪しきイメージを与えるようになつてしまつた。しかし、翻訳語として原語を問題とするならば、オウム真理教の場合の「尊師」は、サンス

クリット語の *guru* もしくはチベット語の *bla ma* (ブマ) の訳語であり、その両原語は師匠至上主義(guruism, lamaism)を表わしているので、そもそも仏教とはなんの関係もない呼称である。一方、*bhante*の方は、かかる特殊な師匠至上主義と関連する要素の全くない、極一般的な第二人称代名詞の尊敬語呼格でしかない。従つて、原語でいえば、両語は互に取違えられる余地の全くない別系列の用語であるにもかかわらず、*bhante*を「尊師よ」と訳すと、とりわけ今日の日本では、*guru*の訳語と誤解されてしまう危険性がないわけではない。とりとて、それを避けて、「尊者よ」といつてもあまりしつくりとはしないし、「御身」でも「あなた様」でも態とふしぐ感じられる。それならばいつそのこと、多少の誤解は承知の上で、「尊師よ」という一般の現代語訳の例に慣つてもよいのではないかというのが、当面の私の結論である。それに、オウム真理教のごとき問題が永く尾を引いてもらいたくはないが、現状がかくある以上、これに託けて、「尊師」という語それ自体が師匠至上主義を表わしているわけではないのだということをその都度意識してもらえるとすれば、「尊師よ」という訳語を用いることも強ち無策なことだというわけではあるまい。

それにしても、余り講釈っぽい話はしたくないのであるが、原語の話が出たついでに言つておけば、私は、翻訳語について

では原語の意味さえ押さえれば充分であるなどとは決して思っていない。ましてや、原語についてその語源を始めとする分析的な説明を試みれば事足れりなどとは、努力を考えたこともない。ただ、そういう説明も必要だと思つてはいるだけである。

さて、先に、仏教の開祖を第三人称として記述する場合に、私も、仏典の多くの例に慣つて「世尊(Bhagavat)」と呼ぶことにすると決めたが、その呼称の原語である Bhagavat は仏教独自の用語ではなくない。それどころか、「幸運(bhaga)を有する(vat)もの」と解されて神そのものを指す極めてインド的な用語である。例えば、ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッタ=ギーター(Bhagavadgītā)』は「神の歌」と訳されることがあるが、それでも一向に差支えないほど、Bhagavat は崇拜の対象たりうる神の「」とやむを指す。仏教の開祖もインド人の仏教徒にとっては神の「」とき崇拜対象に映じたに違いない。これを多くの漢訳では「世にも尊い人」という意味で「世尊」と訳したのである。

一方、アッサジの呼称からは外すこととした「佛陀」もしくは「仮」という語は、漢字による音写語ではあっても意訳語ではない。サンスクリット語やペーリ語などの *buddha* がその原語であるが、これは、「覚る」という意味の動詞から派生した語で、「覚った人」を意味する、古代インドでは極一般

的な普通名詞であった。従つて、これまた元来は仏教独自の用語ではなく、仏教が成立するころのインドでは、ジャイナ教の聖者たちも、ウバニシャツドや叙事詩の聖者たちも、皆「覺つた人(buddha)」と呼ばれていた。特に、ジャイナ教では、その師匠至上主義を告げる四十五人の仙人(rsi)は全て「覺つた人(buddha)」の状態に達したものとされていたからであるから、「仏陀(Buddha)」が仏教の開祖に特定されるようになつたのは、後代の歴史的展開の結果でしかないのである。

また、歴史上の仏教の開祖であることを特定しやすい用語として「釈尊」という音写と意訳を並用したような呼称も使われるが、これは、「釈迦族(Sākya、釈)」出身の「聖者(muni、尊)」という意味の語の省略形と解されている。しかし、漢語としての「釈尊」の初出に準ずるような例は必ずしも確認されているわけではない。勿論、インド側の種々の文献において Sakyamuni は問題なく多用されているので、インド側の用例に未確認の要素があるわけではない。

この呼称は、仏教の開祖の出身部族が特定されているために、インド的観念に見合つた多くの bhagavat や buddha が予想される中で、その区別を明示する必要のある場合に有効となる。現に Sakyamuni は、大乗仏教の展開と共に、三世十方にわたる多仏思想が著しくなつて来た時に、頻出するようにな

つたのである。しかし、この呼称の場合でも、部族名以外の muni は、内的な力で動く沈黙の苦行者を意味する語なので、この muni にも、仏教的というよりはむしろ古代インド的ニュアンスの方が強く込められている。

更に、仏教の開祖の呼称の中には、仏教の開祖自身によるも承認されたとされる呼称として有名なものに tathāgata がある。これは「かく去れり」とも「かく来れり」とも解釈されるものの、いずれにせよ、「真理の体現者」を指す語であるが、漢訳では一般に後者の解釈に従つて「如來」と訳されている。しかし、この語とても、仏教独自の用語ではなく、ジャイナ教でもこれと類似した tathagaya (そゝに去れり) が、tathāgata と同様に、「真理の体現者」を指す語として用いられていたらしい。また、tathāgata の意味にしても、始めてから「真理の体現者」を含意していたわけではなく、その古い用例では、むしろ生きとし生けるものとしての人間や動物を指していたという解釈もあるくらいである。

の方が強かつたのであつた。従つて、仏教の特質は、インド一般に共通する開祖の呼称にあるのではなく、宗教上の偉人を指すインンドの言葉で尊称された当の開祖がなにを語りなにを主張したのかにあるのでなければならない。それゆえ、仏教の正統的学派の規定によれば、仏教 (buddha-vacana) とは、如来 (Tathāgata) が他者に表示できるように語つた言葉のことである、とそれでいるのである。しかも、この規定によれば、仏教徒とは、その如来の言葉を信じ、信じるがゆえに、なにが正しい仏の言葉であるのかを断えず考えていくものでなければならないであろう。

しかし、考えてみれば、なにもこれは仏教に限つてのことではないはずである。例えば、キリスト教 (Christianity) のことについて考えるのに、その語の由来するヘブライ語のマーシー・アッハと同義のギリシア語の *Xριστός* (Christos) が「聖油を注がれたもの」の意で元来はユダヤ民族救済の王を指していたとしたところで、それによつてユダヤ的民族意識が多少理解できるにしても、かかる方法によつて、あのイエス・キリストのこと信じたり知つたりすることができると思つ人はいらないに違ひない。キリスト教とは、ユダヤの民族意識に解消できるような民族救済の王の教えではなく、かかる民族の尊称によつて呼ばれうるに値する人の言葉を神の言葉と信じたところから始まつた宗教だからである。その場合

に、キリスト教においては、イエスがキリストであると信じられているわけだが、仏教の場合にもそのような言い方をして、ゴータマ (Gotama、瞿曇、喬多摩) が世尊であり仏陀であり如来であると信じられたと言つとも可能であろう。ただし、イエスが人の子の名であるのとは異つて、ゴータマは、シャーキヤ族のファミリー・ネーム (gotta, gotra) である」と注意しなければならない。

もつとも、仏教をキリスト教に擬えようなどという人はそう多いとは思えないでの、東洋の仏教を信じている人の中には、右のような私の言い方そのものが気に入らないという人も結構いるのではないかと思う。しかし、よく注意して下されば分かるように、私は、殊更に仏教をキリスト教的に解釈せんとして右のように言つたわけではなくして、仏教が本来的に世尊の言葉や主張を重んじていたのだということを言いたかつただけなのである。しかも、言葉による主張を重んじるということは、仏教を言葉以前のインド一般の習慣に解消してはならないということでなければならない。また、私は、仏教を語るのにキリスト教を決して持ち出さない人以上に、仏教とキリスト教とは全く異つた宗教だとも思つてゐる。しかし、異りは、言葉によつてのみ指摘され主張されなければならぬのである。

この小説は、仏陀の言葉を信じたとすればどういうことに

なるのかを書いてみようとするものであり、それが作者たる私の意図にほかならないが、しかし、そうであればあるほど、そのことは作品によつて示さなければなるまい。それにしては喋りすぎていると、またしても同僚、後輩から冷やかされそうであるが、次には、先の初回分につき、学部内の先生方に教えて頂いた貴重な話を書き記しておこうと思う。

前回は、昭和天皇の崩御に絡めて、クリストファー教授を相手に私が「国体の精華」などの語句を含む『教育勅語』の一節について語つたことを述べたが、この文章が公けになつた昨年秋の学部教授会の席で、私が懇意にしている五十年になつたばかりの教授から、「国体」の問題に関連して、『国体の本義』に英訳のあるのを知つていて質された。私は、その存在を全く知らなかつたし、アメリカ人である日本通のクリストファー教授からも伺つたことはなかつたので、直ぐに知らないと答えたのだが、その教授によれば、『国体の本義』には終戦の数年後にアメリカで刊行された英訳があり、彼はそれをアメリカの同世代の学者から教えてもらい、今はそのコピーを手元に所持しているとのことであつた。私は彼にその再コピーをお願いしたわけではなかつたけれども、いかにも欲しそうな顔をしていたに違ひないらしく、その教授会が終つてから十日も経ないうちに、私は彼からそのコピーを頂いていたのである。その時の彼の話によれば、近時の日本に

おいて俗受けしている知識人の考え方を批判的に解明するためにも『国体の本義』の研究は必須のものであり、それゆえに、これを徹底的に調査検討するための研究会が学部内有志で作られているから、私にもぜひ参加しないかとのことであった。伺えば、その数名の参加者も全て私の懇意にしている先生方ばかりなので、私に参加を断る理由は全くなかったのであるが、これが年を取つたということなのであろう、停年を来年三月に控えた私は、飲み会はもとより、あらゆる会合に出るのが面倒臭くなつてしまつてゐるのである。飲み会と違つて、研究会には参加すれば大いに得るところも大きいことは承知しており、ましてやその時誘われた研究会は、私の世代としても私自身としても非常に関心のあるテーマを扱つてゐることは明らかなので、一度は参加しようと思つたのであるが、停年後も続くらしいその研究会の今後のことを考えると、結局は不精が先立つてお断りすることになつてしまつた。

しかし、なにはともあれ、我が学部内に、数名の有志ではあれ、『国体の本義』を批判的に読む研究会ができてゐることは、そのことだけでも極めて有意義なことだと私は思つてゐるのである。ところで、『国体の本義』は英訳の序文によれば、昭和十二年三月に刊行され、以来最後の奥付を持つ昭和十八年三月までの間に、約一九〇万冊が発行されたのだとい

う。これは、私の十歳の年から十六歳の年に当るが、当時の私は、政治的な問題や社会的問題に関心が薄かつたせいなのか、「国体明徴」というよくな言葉は耳にしていたと思うが、『国体の本義』などというものが発行されていたことは全く知らなかつた。私が本書の存在を知つたのは、戦後になつて、アメリカ留学から帰つてからではなかつたかと思う。戦前の国家イデオロギー形成における仏教の役割を批判的に検討する必要があつた時期に知つたことなのだが、驚いたことに、実際手にして読んでみると、私が全く知らなかつた本であるにもかかわらず、そこに書いてあることは、私が戦前の成長期に学校の先生を始めとする大人たちから聞かされ、ほとんど躰で覚えているようなことばかりだつたのである。そのことによつて、私は、『国体の本義』がいかに知らず識らずのうちに私たちに大きな影響を与えていたかを思い知つたのであるが、その後、昭和三十年代に、私よりも一回りも二回りも先輩の学者たち、例えば、中島健蔵氏の『昭和時代』や、丸山真男氏の『日本の思想』などによつて、我が国の「国体」の思想に批判的な論及がなされ、私もそういうものに目を通しておられた時期があつたものの、意外にも『国体の本義』そのものへの言及はなかつたように記憶している。

さて、『国体の本義』の英訳を頂戴して以来、我が学部のこの研究会有志の先生方とは、その件で時々話をする機会もあ

つたが、彼らによれば、『国体の本義』の「国体」とは、誤つて仏教の正統のように考えられてしまつた似非仏教の「体用」思想と深い関係があり、「国体」の「体」とはその「体」にはかならないので、その点を仏教の正統と異端を明確にしつつ、しかも似非仏教を仏教として認めてきた仏教者の責任として『国体の本義』の「国体」を批判し反省していくなければならぬのだということである。『国体の本義』という存在も知らずに、しかもその圧倒的影響の下で育つたことを自覚している私のような世代のものから言わせてもらうならば、戦前の国民道徳の形成に及ぼした本書の影響力の凄まじさを本書の名前と共に明瞭にすることは益々必要なことだと思つてゐる。というのも、私と同世代のもの、およびそれより一回り上の世代までのものを含めても、この現在においてなお『国体の本義』と酷似したことと言ひ続け、しかもそれが『国体の本義』に由来することを全く自覚していないような政治家や知識人が極めて多いように感じられるからである。

私は、個人的に、私の育つた昭和初期と平成の現代とは極めて類似した歴史状況の中に置かれていると感じているが、歴史は進歩するとはいゝ、当時より悪い要素と私に思われるものがエコロジーの世界的な流行にはかならない。それと共にグローバルという言葉も流行つてゐるようだが、地球の環境を守るために進歩の思想を否定し自然に帰るしか方法がない

いように主張するエコロジーは、もともと自然を大切にし自然に還つていると自負している我が国のアニミストを益々付け上がらせているだけだからである。この国際化の時代に、その我が国のアニミズムを世界に売り込む義務があるようないが、しかし、これは決して他人事なのではない。

今学年度になつて、我が大学内で、北海道にある短期大学を四年制に改組するという計画が、教職員の頭越しに、突如として浮上してきた。この計画は経営権をもつた理事者側の問題として処理され、各教授会には正式な審議事項として諮られることはなかつたのであるが、我が学部は、我が教授会自身の発議による案件としてこれを審議し、つい最近の臨時教授会において、全員一致で反対決議文を採決した。民主主義を無視した理事者側に対しても当然の处置だと思うが、この理事者側を実質上牛耳つてゐる総長は、それこそ私より一回り上の世代で、戦前は、『國体の本義』に従つて、教育に従事していたはずであり、そのせいか、それがほとんど御自身の血肉と化してしまつていて、日頃から『國体の本義』と同じ文言がついつい自分の言葉としてポンポンと口を突いて出てきてしまふような人である。まさか、この総長自らが筆を取りようなことはなかつたであろうが、その問題の計画書の中には、新しく設立されるはずの国際文化学部国際文化学科

について、「外国の文化」の攝取は既に過去のものであり、これから国際社会の中にあつては、「日本の文化」を積極的に売り出すことのできる国際人を養成しなければならず、その養成機関が当の学科であり、かかる国際人養成のためには、禅の精神こそ最適である、というようなことが書いてある。今回は、反対決議文さえ採決されればよいわけであるから、余計な発言は一切しなかつたが、本当は、国際化を呼びながら、右のような主張が旧態然として繰返されていることが恐ろしいことなのである。しかも、これは、なにも我が大学内だけのことではない。国のレベルで、国際日本文化研究所が設立されたのもそう遠い昔のことではない。その初代所長を務めた人は、私と同世代である。

しかし、私の同世代が皆こうなのではない。先般、ふと新聞の投書欄で目に止まつた方は七十歳とあつたから、既に誕生日がきていれば、私と全く同学年であるが、「海の日」の祝日にについて次のような意見を寄せていた。全く同感なので、一九九六年七月十七日（水）付の『毎日新聞』より、その全文を引用させて頂くことにしたい。無職であるが、お名前は日野資純で静岡市の方である。

国民の祝日・海の日（7月20日）が今年から始まるが、昨年2月の衆院通過までに十分な世論の裏付けがあつたろうか。1966（昭和41）年、建国記念の日制定の前後には世

論を二分するほどの論議があつたが、海の日の場合、今年のカレンダーを見て、初めて知つたという人が私の周辺にも多い。

海の記念日は41(同16)年、日中戦争中に7月20日と決まつたが、それは明治天皇が明治初年、東北ご旅行の帰りに横浜へ船で着いたのがその日だたといふ事情と、戦中の海外発展の思想が結合したことによるという。第1回の日には、ある大臣が「海を制せよ」と演説までしている。

今、民主主義の時代に世論の動向も確かめず、天下り的に決まつた祝日の背景は何か。建国記念日の時は、戦中世代が多く健在で論陣を張つたが、今回はほとんど表面化していない。

最初の海の日を迎える前に、大いに議論したいと思う。

ところで、私は、せつかくの研究会にも出ないくらいであるから、仲間と飲むこともほとんどなくなつた。大学院生とは数年くらい前までなら、演習の後で飲んだりすることは結構あつたのだが、最近はそれすらもなくなつた。ましてや、学部生と飲むなどということは、このところ皆無だつたのだが、ついひと月ほど前に、夕刻に終了するある授業で、講義を終えて質問を受けているうちに、ふと気がつくと、一人の女子学生を含めて私の気に入つた学生がたまたま私の周りに四、五人残つていたので、ちょうど暑い日だということもある

つて、ビールでも飲まないかと私の方から誘つた。彼らは快く応じて、私は本当に久々に若い学生と一緒に飲む機会をもつたのである。久々だということに加えて、若い美しい女子学生がいたこともある。私の気持は昂揚し、大ジョッキもかなり早いペースで空き、口も随分と滑らかになつた。なん時間くらい経つたかはよく覚えていないが、私がそろそろ微酔い加減になつたころに、恐らくは、そういう話の切つ掛けを狙つていたのだと思うが、私がよくできる学生の一人と期待もしている学生が、私の質問に応じて彼の高等学校の生活が中途で挫折したことについて語つていた話に一切りついたところで、急に『歯車』はどう思いますか、と聞いてきたのである。私が芥川を好きだということは、書くことでも話すことでも別に隠していることではないから、その学生はもとより周りにいる他の学生も皆知つてることに違ひない。私は余り氣負うことなく、『歯車』は芥川の作品の中でも格別に好きだとか、同じ遺稿の中では、『或阿呆の一生』や『続西方の人』の方が好きだとか、まず一言簡単に答えてしまえばよかつたのであるが、その学生の真剣な目差しを感じたのと、私がなにを言い出すかと固唾を呑んで待つてゐるかのようなかつたのであるが、その学生の真剣な目差しを感じたのと、他の学生の視線を感じたために、私はその一言を発する時を逸してしまつた。私は一遍に酔いの覚めるのを感じ、それこそ歯車が回り出すのを覚えた。恐らく、沈黙の時はそれほど

長くはなかつたのであらうが、私には、自分の一生をその沈黙の間に断片的にではあるが全て思い出したよな気持がしたのである。

私は大学卒業間近になつたあたりから、意識して芥川のみならず小説はあまり読まないよになつた。とりわけ、芥川の自殺後に公刊された遺稿中の自伝的なものは故意に避けるようにさえなつたのである。恐らく、大学に残つて仏教の研究をするという方向へ変わつていつた自分を守るためだつたに違ひない。私の脳裏には私の一生の断片と共に『歯車』の断片も蘇つてきたが、それらの断片を取上げてなにか気の利いたことを言おうなどという気持は、その真剣な目差しの学生を目の前にしていつの間にかもうすっかり失せてしまつてゐた。次の瞬間に、私は「あなたはどう思つているのですか。」と当の学生に素直に尋ねてゐる自分に気がついていた。「一番好きなのです。『歯車』を初めて読んだ時は、それこそ、背筋が寒くなるというか鳥肌が立つといふ、文字どおりそういう気がしたのです。」とその学生は答えたが、私には不思議と素直にそのとおりであらうと思われたのである。

翌日は、なん十年振りかの二日酔の気分であつたが、意外なことに頭痛はしなかつた。午後には、それこそ半世紀に近いだろうという気持になりながら、『歯車』を繙いてみた。ついでに、他の遺稿も読んでみたが、やはり読むのがつらいの

である。そして、七十歳にじきなろうとするまで生きてきた自分の一生を考えると、ここまでこれたのも、どこか野蛮でどこか神経も強かつたゆえではないかと、芥川の遺稿を久々に読み返しながらしきりと思われたのであつた。また、『歯車』を実際に読み直してみて、次のような一節について、当時の私がどのように思つていたのかも蘇つてくるよな気がしたのである。

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いが、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、伝統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈々僕にはたまらなかつた。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネエムに用ひた「寿陵余子」と云ふ言葉を思い出した。それは邯鄲の歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまひ、蛇行匍匐して帰郷したと云ふ「韓非子」中の青年だつた。今日の僕は誰の目にも「寿陵余子」であるのに違ひなかつた。

若かつた当時の私は、「恐しい四つの敵」を捨てそれから解脱しなければならないというような「宗教」に対しても、芥川と共に、反抗的 精神を示して いたはずである。それが、大学へ残ると決めたあたりから、かかる反抗的 精神も失せて、邯鄲を知らない寿陵の田舎者でいいやという開き直りに変わつていつたのだと思う。今回、「寿陵余子」というすっかり忘れていた『歯車』の一節を思い出し、まだ野蛮とはいはず多少は纖細を残していた当時が偲ばれもしたのであるが、今は却つてこの年になつて「寿陵余子」として小説でも書いてみようとしているにすぎない。思うに、この現代の日本は、「寿陵余子」を嗤い、寿陵から一步も出ないことを誇る自然で野蛮な国際人が多過ぎるのである。しかし、他方では、私に『歯車』の感想を求めた学生のような、芥川の愛読者が決して減つてはいないのだということを信じたい気持の方も依然と私には強い。

ただ、そんな私のようなものでさえ、自然で野蛮な雰囲気をひしひしと感じるのであるから、邯鄲の歩みを学ぼうなどというイデアはこの国ではやはり瀕死の状態にあるのかもしれない。私は女性薦視者では全くないのだけれども、自然と共に女性がその性を謳歌することは必ずしも文化的なことだとは思っていない。しかし、今日、自然讚美者たるエコロジストと女性讚美者たるフェミニストと対しては、誤解されずに批判することはなかなかに難しいことだと思う。そう思いつつ、誤解されかねないことを言うのはおかしいかもしないが、今年の芥川賞と直木賞とが共に女性だというのも極めて象徴的のことである。しかも、洩れ聞くところによると、芥川賞受賞作品では蛇、直木賞受賞作品ではオオカミ犬が重要な役割を果しているという。また、前者の受賞者は、「O157の騒ぎを見ても、人間の周りに細菌はいるし、都会でも体内でも共存している。人間と自然が分かたれたものとは思えない。」と語ったという。自然と人間が共生する時代がもう手近かにやって来ていて、それを讃美する女性も増えてくるということなのであろうか。

(一九九六年七月二十一日)